赤十字NEWS

April 2017 Vol.923 4
http://www.jrc.or.jp

人間を救うのは、人間だ。 日本赤十字社

赤十字新聞 編集・発行／日本赤十字社 広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL:03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。

熊本地震1年 復旧の歩みを被災者とともに

石垣・建造物の復旧にあたっては文化財的価値の保全と耐震・安全対策の両立など課題も多く、復旧には概ね20年、被害額は概算で約634億円に上る。なお、天守閣に関しては復興のシンボルとして2年後には何らかの形で公開を予定。

昨年4月の熊本地震で、重要文化財建造物13棟すべてが倒壊・一部破損するなど甚大な被害を受けた熊本城。市民・県民の復興のシンボルになるものとして、早期復旧を目指した取り組みが進められています。安土桃山時代に築かれ、数百年の歴史を刻んできた熊本城は、博愛社（日本赤十字社の前身）創立のきっかけとなった西南戦争（明治10年）では主戦場の一つに。日本有数の文化財として多くの人から親しまれており、震災後は全国から復旧支援として、多くの寄付が寄せられています。復旧を統括する熊本城総合事務所（熊本市経済観光局）の河田日出男所長は「大勢の方々が被災される中、熊本城の早期復旧を願う声が多数寄せられています。その期待に応えられるよう、一日も早く震災前の姿を取り戻したい」と話します。（熊本地震関連記事 P.2～4）

CONTENTS

SPECIAL 2 3 4
熊本地震から1年
いま耳を傾けたい被災地からの声

健康豆知識
中高年に忍び寄る血糖値スパイク

SPECIAL 5 6 7
「私たちは、忘れない。」未来へつなげるプロジェクト
サポーター企業、イベント紹介
踏ん張り続けた6年

TOPICS 8 9
平成29年度日本赤十字社の予算概要
常任理事会開催報告
理事会開催報告
第89回代議員会審議結果公告

AREA NEWS 10 11
北海道・青森・岩手・宮城
福島・茨城・埼玉・東京
神奈川・京都・大阪・徳島
Love in Action Meeting（LIVE）応募受付
赤十字ライトアッププロジェクト2017のお知らせ
Voice&プレゼント

WORLD 12
平成29年度青少年赤十字海外支援事業
ネパールで学校・地域の衛生環境を改善
バヌアツで子どもの命を守る防災教育を促進
連載 人道支援の現場から⑨
フィリピン保健医療支援事業（事業管理）
三浦 貴子

今月の出会い

くまモン

熊本へのご支援、本当にありがとうだモン！

「皆さんが笑顔になれるよう、これからも頑張るモン」。熊本県営業部長兼しあわせ部長の肩書を持つ、県のPRキャラクターくまモン。震災後1年を前に「部長」としての決意を身振り手振りでこう伝えてくれました。

全国的な人気を誇るキャラクターだけに、震災後約3週間にわたり活動を控えていた時は、県内外から心配の声が寄せられました。その間は、自分に何ができるのかを考えていたそうです。「たくさんの方が熊本を応援してくれて、ボクも元気をもらったモン。皆さんに笑顔と感謝の気持ちを伝えたいと思ったモン」。その言葉通り、昨年5月5日に活動を再開。避難所慰問など被災された方に寄り添う活動を行い、11月からは全国を飛び回るお礼行脚に。今年1月に佐賀県を訪れた際には日本赤十字社佐賀県支部にも足を伸ばしてくれました。「ハートラちゃんにも会ったモン。一緒にくまモン体操を踊ったモン」

震災からまもなく1年ですが、復興はまだ道半ば。県民を元気にするくまモンの役割はますます大きくなりそうです。「いろんな所におじゃまして熊本をPRするモン！ もっと元気な熊本になれるように心を一つにがんばるモン。ぜひ熊本に遊びに来てくまさい☆」

PROFILE

2011年3月の九州新幹線全線開業を機に誕生。年齢はヒミツのやんちゃな男の子。知事から熊本県営業部長に抜擢され、その後、ゆるキャラグランプリ2011王者に輝きました。2014年からしあわせ部長も兼任。現在は「くまもとから感謝をプロジェクト!」として全国を訪問するなど、復興のシンボルとしても活躍中。

熊本地震1年
いま耳を傾けたい被災地からの声

2度にわたる震度7の激しい揺れにより、関連死・二次災害死を含む死者206人、建物損壊18万7771棟（3月21日現在）など、甚大な被害を出した熊本地震から間もなく1年。昨年秋までにすべての仮設住宅が完成し、被災者は生活再建に向けて新たなスタートを切っています。しかし、住宅の建て直しなど地域再生に向けた課題はこれからが本番。日本赤十字社は多くの皆さんが笑顔で復興に取り組めるよう、義援金の受け付けなどを通じ、引き続き被災地を応援してまいります。

日本赤十字社は4月14日の前震段階から、各都道府県支部の救護班を熊本県支部へ派遣。6月2日の活動終了までにdERU（仮設診療所）を3カ所に設置するとともに、207班、約1600人の救護班が救護所や巡回診療などでの医療支援・救護活動に当たりました。診療した傷病者数は約7000人にのぼります。

一方、県の基幹災害拠点病院として被災地の重傷者らを受け入れた熊本赤十字病院には、全国の赤十字病院から医師・看護師ら約300人の要員を派遣。多くの医療機関が被害を受けた被災地の地域医療を支える役割を果たしました。

医療救護活動以外にも、避難所などでのリラクゼーションやこころのケア、健康相談、母子支援、避難所の環境改善といった幅広い活動で、被災者の生活を支えました。

救護班活動支えたボランティア

本震翌日の4月17日、青年赤十字奉仕団員を中心に立ち上げた熊本県支部災害ボランティアセンター。延べ261人のボランティアが、毛布や安眠セットなどの救援物資の積み込み・搬送、救護班の避難所までの道案内、避難所でのニーズ調査などを行いました。赤十字奉仕団員を中心とするボランティアは、全国各地で義援金の受付事務などでも活躍しました。

今年3月20日までに寄せられた義援金は279億5196万円余り。熊本、大分両県に設置された義援金配分委員会を通じ、被害状況に応じて全額が被災者に届けられます。3月末時点で、受付金額の99・8％にあたる278億8506万円余りを義援金配分委員会に送金しています。

被災者のために「気づき、考え、実行した」生徒たち

御船町立御船中学校　吉見和洋校長
熊本県青少年赤十字（JRC）指導者協議会会長

地震後、体育館は避難所となり、グラウンドは車中泊の自動車であふれました。約600人が2カ月にわたり学校で避難生活。自宅が被災した生徒も多く、わが校の体育館を含め各避難所から学校に通ってくる子どもたちも大勢いました。

一方、学校は校舎の安全確認が取れた5月9日に授業を再開しましたが、近隣の滝尾小学校への通学路が通行不能となったため、80人の小学生もわが校で一緒に学ぶことに。実は、最初は不安でした。震災でつらい思いをした生徒たちは、小学生に優しくできるだろうかと。

心配は無用でした。みんなよく面倒を見てくれました。生徒たちは、同じ経験を共有した小学生と接することで「自分たちがしっかりしなければ」という気持ちになったのではないかと思っています。

思いやりは、避難所の被災者に対しても発揮されました。吹奏楽部の生徒たちは「被災者を励ましたい」と体育館での演奏会を実施。避難所での物資配布や掃除などを手伝った生徒も大勢います。9月の体育祭では「故郷を応援しよう」と生徒たちが、集まった町民の皆さんに大きなエールを贈りました。

震災後の生徒たちを見て思うのは、心を育てる教育の大切さです。生徒たちは誰に指示されたわけでもないのに被災者のために活動しました。彼らの活動の根っこの部分には、青少年赤十字（JRC）が目標として掲げる「気づき・考え・実行する」が生かされていたと考えています。

「テント生活を2カ月がんばりました」

西原村の仮設住宅に入居
坂田京子さん

震災前には地震なんて考えたこともありませんでした。ところが本震で自宅はメチャクチャ。全壊の判定を受けた時は、これからどうなるんだろうと不安になりました。

仮設住宅に入れるまでは3カ月間あったのですが、最初は自宅に停めた車で車中泊。その後は借りたテントを敷地に張って野外生活を送りました。無料開放された温泉に行けて本当にありがたかったです。本震の翌日に青空の下でお化粧をした事は忘れられません。

ですから仮設住宅に入れた時はほっとしました。同じ地域の人同士が近くに入居していることもあって、良い近所付き合いもできています。いろんな支援をいただけたことに本当に感謝しています。義援金も仮設での生活をスタートする際の生活用品や家財などの購入に少し充てさせていただきました。早く家を再建できて、「復興できた」と言えるよう頑張りたいと思っています。

熊本県内16市町村に110団地、4303戸の仮設住宅が整備。3月21日現在、4181戸で1万990人が仮設住宅での生活を送っています（写真は西原村の仮設団地）

「私の復興はまだ見通せません」

西原村の仮設住宅に入居
松岡有美子さん

自宅は本震で全壊。実家に家族みんなで避難しましたが、狭くて大変でしたね。仮設住宅に入居できた時は、やっと安心できるかなって、うれしかったです。でも、狭いのは相変わらずで、今も6畳の部屋いっぱいに布団を敷いて家族4人で寝ている状態です。

昔ながらの近所の付き合いが残る地域なので、震災後もお互いに協力し合って乗り切った部分がたくさんあります。全国からも多くの支援をいただき、感謝の言葉しかありません。日赤さんにも保育園の敷地内に診察所を開設していただきました。震災後のひどいほこりで目を痛めた際には、私も診てもらって助かりました。

私にとっての復興は、家の再建ができた時でしょうか。でも、専業農家ですから最初に手をつけなきゃいけないのは生産に必要な小屋とか貯蔵庫。自宅は後回しにせざるを得ないから、まだ先は見通せません。

再建に向けた取り組みスタート
日赤発祥の地「ジェーンズ邸」

日本赤十字社発祥の地として知られるジェーンズ邸は、西南戦争（明治10年）の最中、有栖川宮征討総督が元老院議官・佐野常民（後の日赤初代社長）に対して博愛社（日赤の前身）設立の許可を出した建物。熊本地震の本震により全壊しましたが、再建に向けた取り組みが始まっています。

ジェーンズ邸（明治4年に洋学校の教師として招いたL.L.ジェーンズとその家族の住居として建設）は、熊本県内に残された最古の洋風建築。県の重要文化財にも指定されています。熊本市は可能な限り元の部材を使用して復元する方針で、建物部材や資料類の調査と格納作業を進めています。破損の度合いに応じて再利用可能なものを振り分けますが、市担当者によると「基本的には木材部分は再利用。展示資料類も多くが土ほこりで汚れただけなので再展示可能」とのこと。今年秋ごろから再建工事に着手し、平成31年度の完成を目指します。

震災前は小中高生の見学も多く、年間約6000人が訪問。結婚式の「前取り写真」スポットとしても人気でした。再建にあたり市では文化財的価値の復旧とともに、より多くの人に親しまれる活用法についても検討していくとしています。復旧費用は約5億円。市は一般財源とともに、国・県からの補助金、今年2月から受け付けを始めた熊本市文化財災害復旧支援金※への寄付金も充てていく予定です。

※熊本市文化財災害復旧支援金への寄付方法など詳細は熊本市のウェブサイトをご覧ください。

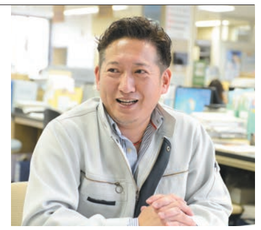
在りし日

本震後

現在

「コミュニティーの力を生かした復興を目指します」

熊本県西原村役場　震災復興推進室
係長 山田孝さん



震災で私たちが再認識したことの一つが、西原村の持つコミュニティー力の強さです。長年にわたり野焼きや道路の清掃活動など地域全体で取り組み、お互いの顔が見える関係を作ってきました。本震後の安否確認を住民だけの力で数時間のうちに終わらせたり、心配していた仮設住宅での孤独・孤立の問題が起きたりしていないのも、培ってきた人間関係があればこそだと思っています。

今後の復興課題は住宅再建です。集落によっては8～9割が全壊。地盤が崩落した地域もあります。しかし、自宅は元の場所に建てられなくても、震災前の人間関係は壊さない――この1年間、数十回の話し合いを経て、この方向性を確認してきました。私たちの強みであるコミュニティー力を大切にした復興を進めていきたいと考えています。

全国からのご支援については、災害経験を踏まえて“ごのタイミングではこうした支援が必要。”と先回りしたバックアップもあり、心強く感じました。日赤さんの医療分野など、行政では対応できない専門分野の支援もありがたかったです。もちろん、あらゆる分野でマンパワーが必要。すべての支援に感謝しています。

復興への歩みを進めている現段階では、「被災者と一緒に行動」「共に作り上げる」支援が求められています。さまざまな関わりで、私たちの復興を見守っていただけると幸いです。

倒壊家屋の撤去や被災道路の復旧など、生活の再建に向けた整備を進めている。写真は益城町の地震直後（左）と現況（右）

広告

社会福祉法人黎明会（公社）全国有料老人ホーム協会正会員
介護付有料老人ホーム
熱海 ゆとりあの郷
雄大な眺望と温暖な風土のもと、心豊かに暮らす…
「熱海ゆとりあの郷」には、ほんものの豊かさと、心の安らぎがあります

特別見学会の日程
4月 11日(火)、17日(月)、27日(木)
5月 9日(火)、18日(木)、26日(金)

熱海ゆとりあの郷に住まう魅力
歴史ある社会福祉法人が経営母体
温暖な気候・絶景の眺望
24時間365日 医師・看護師が常駐
自慢の自家温泉
暮らしの多様なサービス
安心の「終のすみか」

熱海ゆとりあの郷「東京入居相談室」
〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社ビル東館2階
検索 熱海 ゆとりあ ホームページ http://www.yutoria.net
見学の申込みや問い合わせは、下記フリーダイヤルまで。
フリーダイヤル 0120-058-211 受付時間／9時～17時 月曜～金曜
●所在地／〒413-0038 静岡県熱海市西熱海町1丁目24番1号 TEL.0557-81-2322／FAX.0557-82-5260
●交通／新幹線・東海道本線熱海駅下車 熱海駅から専用マイクロバス運行（約15分）●類型／介護付有料老人ホーム一般型特定施設入居者生活介護●居住の権利形態／利用権方式●利用料の支払い方式／一時金方式●入居時の要件／入居時自立●介護保険／静岡県指定介護保険特定施設（一般型特定施設）・介護予防特定施設●介護居室区分／全室個室●一般型特定施設である有料老人ホームの介護にかかわる職員体制／2.5：1 以上

知ってて良かった！ 日赤のドクター＆ナースが教える健康豆知識

大津赤十字病院　副院長・第二内科部長・医療社会事業部長
岡本元純（糖尿病代謝・内分泌内科）

㉞ 中高年に忍び寄る血糖値スパイク――命にかかわるリスクも

血糖値が食事をした直後にだけ高くなってしまう――この状態を血糖値スパイクといいます。血糖値を時間ごとにグラフ化したときに、食後の跳ね上がるさまがスパイクの形に見えることから、この名前がつけられました。一般の健康診断では、空腹状態で血糖値を見るので、血糖値スパイクの人も「正常」と判断されてしまいます。ところが実際には隠れ高血糖を抱えてしまっているのです。

“一瞬上がるだけだから大したことない”と思ったら大間違いです。糖尿病と同様に血管障害の原因となり、心筋梗塞や脳梗塞などのリスクが高くなることが分かっています。つまり命に関わる病気に直結しているということ。にもかかわらず、血糖値スパイクにはまったく自覚症状がありません。それが怖いところです。

ただし、血糖値スパイクを発症しやすいタイプは分かっています。肥満、運動不足、脂っこい食事を好む――といった方たちです。年齢が上がるほどリスクも高くなります。自分や家族に“もしかしたら…”という方がいたら、ぜひ専門医を受診してください。

ところで、なぜ血糖値が食後の一瞬だけ跳ね上がるのでしょう。答えは簡単です。体の中で糖を処理する能力が低下しているから。逆をいえば、体内の糖処理能力を高めることが、血糖値スパイクの予防と治療のポイントということになります。そのためには、運動の習慣化、食生活の改善、肥満の解消などが必須。私が診ている患者さんを例にとると、体重を2～3キロ減らすだけで、食後の血糖値の上がり方がぐんと小さくなっている。つまり体内で糖を処理する能力が回復したのです。

しかしながら、生活習慣を改め、糖の処理能力を高めるには時間がかかります。そこで、食べ方を改善することで毎食後の血糖値上昇を抑える対処法を併せて実践してください。一つは野菜から食べること。消化酵素で分解できない食物繊維を最初に胃に入れることで、糖質の分解速度を遅くします。また、ゆっくり食べることも大切です。早食いやドカ食いは血糖値を上げる典型的な悪い食べ方。食事に時間をかける習慣を身につけましょう。

▲血糖値スパイクの予防は毎日の食生活が大事。洋食よりも和食を選び、脂っこいものは控え目に。ジュース類もすぐに血糖値を上げてしまうので注意してください

大津赤十字病院
〒520-8511
滋賀県大津市長等一丁目1-35
TEL 077-522-4131（代表）

学生のボランティアは発災後支部に泊まり込み、災害ボランティアセンターの運営にあたりました

「必ず復興します。見守ってください」

日本赤十字社 熊本県支部
岡村範明事務局長

昨年の震災では全国からたくさんのご支援をいただきました。ありがとうございました。私たちが救護活動に力を注ぐことができるのは、本社・支部へのご寄付（活動資金）があればこそです。日頃からのご支援に心より感謝申し上げます。また義援金489億円のうち、274億円は日赤を通じて寄せられています（2月末時点）。義援金は今も増え続けていて、来年3月まで受け付けが延長されました。ご協力に御礼申し上げます。

救護団体としての役割を発揮

熊本は、災害救護にこそ支部の存在意義があるという意識で、国内・国際救護の実践を重ねてきました。例えば、熊本赤十字病院はこれまでに39カ国に延べ270人の職員を派遣。支部としても九州ブロックでの訓練、装備充実などに力を入れてきました。多くの職員が被災した中、救護・支援活動でやるべきことをできたのは、こうした積み重ねがあればこそだと考えています。

日赤に関わるボランティアの皆さんについては今回、救護班のナビゲーター役など支部活動への協力をお願いしました。活動を通じ、青年奉仕団をはじめとする各種奉仕団、赤十字飛行隊や防災ボランティアなど、参加された皆さんの連携が強くなったのは大きな成果だと思っています。

次の災害を見据えた取り組みも

住民の生活は落ち着きを取り戻してはいます。しかし、被災家屋のブルーシートが減るにつれて、町には更地が目立ちはじめています。解体して、更地にした後、どうするのか――。年齢の問題など被災者ごとの個別事情があり、家の再建ひとつとっても単純には決められないのが実情です。

県支部としては、仮設住宅で生活されている方々への健康支援活動や健康相談など、これからも役に立てることがあると考えています。また、私たち自身の日頃の訓練と併せ、学校や地域での防災教育に赤十字としての知見を生かす働きかけをしていくなど、次の災害に備えた取り組みも充実させていかなければなりません。

復興への課題は少なくありませんが、絶対に立ち直るというのが私たちの決意です。今後とも赤十字の活動にご支援をいただきますとともに、私たち県民をぜひ見守り続けていただきたいと思います。

被災者に寄り添った自己完結型支援

熊本赤十字病院　看護師　萩野 田鶴子さん

震災後、被災地の保健師さんたちは本当に余裕のない中、なんとか乳児健診を実施しなければという意思を持っていらっしゃいました。そうした思いを尊重しながら私たちが関わり、自己完結型の支援となったのが西原村での健康支援事業です。

お母さん方とお話する中で分かったことは、どの方も子育てに漠然とした不安を抱えていたということです。行政の乳幼児検診が中止になったり、周囲に相談できる相手がいなくなったりしたことで、母親が一人で問題を抱え込んでいました。「母乳が出にくい」「赤ちゃんに湿疹が…」「体重の増え方はこれでいいの？」などさまざまなことに大きな不安を感じていたのです。医療や衛生など日赤としての専門性を生かした支援で、被災者をサポートできたことは良かったと思っています。

実は私自身にとっては、被災地派遣は初めてのことでした。訓練はその場だけの手当てで完了しますが、本当の災害では長期にわたって、被災者はいろいろな問題に直面します。訓練と実際の違いを痛感するとともに、日赤としてどんな支援が求められるのか、何が可能なのかなどについて考える機会にもなりました。

西原村被災者健康支援事業

日本赤十字社は被害の大きかった西原村の支援事業として昨年6～7月、避難所の高齢者や障がい者、乳幼児を抱える母親らを対象にした健康支援事業を実施。また、熊本赤十字病院では引き続き、10～12月に3歳以下の幼児と母親を集めた「子育て広場」を同村で3回にわたって開き、子育ての不安や感染症予防などをテーマに交流・相談会を行いました。

支援団体の一員であることを再認識

熊本赤十字病院 こども医療センター病棟保育士　宮﨑智恵子さん

西原村の健康支援事業として実施した6月の乳児検診で、お母さんたちが保健指導・相談をされている間、お子さんたちを預かったり、お母さんからの子育ての悩み事などを聞かせていただいたりしました。

お母さんから出された不安の中で一番多かったのはお風呂に使う水の問題です。まだ水道が復旧していなくて、ペットボトル以外の衛生的な水がなかった頃だったので、「子どもをお風呂に入れても大丈夫なの？」と皆さんが心配されていました。想定外の質問だったのでとても印象に残っています。

また「震災後、同世代の子どもと遊んだのは今日が初めて」「ママ友で集まる機会がなかったので、情報交換ができて良かった」といった声も多く聞きました。被災者のこうした悩みは、直接耳を傾けなければ分からなかったこと。被災地へ足を運ぶことの大切さを学びました。

熊本地震は赤十字病院で働き始めて3年目に起きた震災。被災地での活動に関わったことで、人道支援団体である日赤の一員であることをあらためて自覚できたと思っています。

宮﨑さん（左）と萩野さん（右）

「私たちは、忘れない。」

～未来につなげるプロジェクト～

私たちサポーターが一緒に取り組みました。
これまでの災害で得た教訓や支え合った経験を忘れることなく、
1人でも多くの方が防災・減災意識を高めていくことを願っています。

協賛企業の皆さま：

クラウド活用による災害時の社会貢献を追求

株式会社サーバーワークス

東日本大震災後、日本赤十字社のホームページがアクセス集中によってダウンする事態が発生しました。その際、私どもでサイト復旧を行い、その後義援金受け付けシステムの構築をさせていただきました。弊社はクラウドを用いたシステム構築を手掛けていますが、東日本大震災での経験によって、被災地支援をクラウドがより早く的確に実現できることを知るきっかけとなりました。

今年３月11日に行われたエンジニア向けのイベントでは、参加者にバッジとリーフレットを配り、トークセッションでも忘れないプロジェクトに触れ、多くの方にこの活動の理念をお伝えしました。

今後も、当プロジェクトとともにクラウドを駆使した災害対策を深めていきたいと思います。

地域の「いま」のニーズに応える継続的な支援を

ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループ

社員を対象とした啓発活動として、日本赤十字社から提供されたバッジ、ポスターを活用して社内に呼び掛け、われわれに今できることを考える機会としました。また、3月11日に開催した全社会議ではメディカル カンパニーの社員約2000人が「黙とう」を捧げました。同時に、東日本大震災直後の当社の支援活動を振り返るとともに、今後の地域再生のための継続支援を呼び掛けました。

東日本大震災から6年が経った現在、災害看護教育や産業創出を目的とするプロジェクトのサポートや、例年実施する6・7月の「ボランティア月間」に向け、被災地支援プログラムを設計するなど、当社では引き続きさまざまな活動を展開しています。変化する地域のニーズを長期的な視点で捉え、今後もさらなる支援に取り組んでまいります。

「がんばろう！九州」を胸に空から笑顔を届けます

株式会社ソラシドエア

ソラシドエアは、九州・沖縄に基盤をおく航空会社です。

昨年の熊本地震は、当社の第2の就航地である熊本に甚大な被害をもたらしました。

わたしたちは、「九州の翼」の使命として、一日も早い運航再開に全社を挙げて取り組み、「がんばろう！ 九州」復興支援プロジェクトを立ち上げました。熊本県に特化した復興支援機「がんばるけん！ くまモンGO」を運航するなど、九州・熊本への観光需要喚起に現在も取り組んでいます。

プロジェクトバッジは役職員一同が着用。防災やたすけあいの意識を胸に私たちがなすべきこと、私たちだからこそできることに真摯に向き合いながら、安全運航そしてブランドコンセプト「空から笑顔の種をまく。」の実現に向け、社員一同これからも取り組んでまいります。

「私たちは、忘れない。」
踏ん張り続けた6年
見据えているのは「未来」です

受けた被害が違えば、復興の形も異なって当然。そしてどんな復興も、一人ひとりが置かれている状況の中で踏ん張らなければ、未来は見えてきません。もちろん、誰にでも踏ん張る力があるとは限らないのも事実です。だからこそ私たちは、頑張る人の姿を伝えます。それは、すべての人を勇気づける力になっていくはずだから――。

声掛けとか挨拶が大切だよね

岩手県陸前高田市

滝の里仮設住宅　自治会長

小野田 髙志さん

ⓒ Ichigo Sugawara

入居者の心が安らぐよう、小野田さんが集会所をイルミネーション

住宅を再建したり、公営住宅に移ったりで、この仮設から15人くらい出て行ったかな。でも新しい環境に慣れるのは大変。中にはすごく寂しがって、仮設の仲間と話をしたいって、こっちに足を運ぶ人もいるくらいです。

一方で、滝の里は最後まで残る仮設住宅なので、これからは解体される他の仮設から移ってくる人も増えるんだ。そういう人たちとも上手に人間関係を作っていかなきゃならない。これまでもそうだけど、朝の挨拶とか、声掛けとか。大切にしていきたいよね。

私は造成している高台に移る予定だけど、まだ1～2年はかかる予定。そこに自宅を再建できたら、（少しは落ち着いて）全国からの支援への恩返しもできるかなと思っています。

熊本地震では「今返さなきゃ」って

岩手県陸前高田市　滝の里仮設住宅

植村 たえこさん　小野田 たきこさん

震災後、私も母も介護施設に身を寄せたの。でも断水しちゃってトイレの水も、洗濯する水もない。そしたら子どもたちが毎朝、バケツで水をくんできてくれたの。誰に言われたわけでもないのに。みんな頑張ったよね。どの子もそういう経験をしているから、子どもたちは本当にたくましくなったと思うよ。

全国の人からお世話になったのはもちろん忘れていません。赤十字からもらった毛布は今も使っていますし、赤十字が教えてくれたノルディックウォーキングは日課になってるの。そんなふうに支えてもらったから、熊本地震では「今返さなきゃ」という気持ちでした。大したことはできなかったけど。もしまた何かあれば、率先して動きたいと思っています。

見て、食べて、三陸を応援してください

三陸鉄道

中村 一郎社長

ⓒ Ichigo Sugawara

震災当時は県職員として釜石で震災対応に当たっていましたので、地震から5日後に一部区間で運行再開した時は、私自身も勇気づけられました。3年前の全線再開の時は、各駅ごとに郷土芸能や大漁旗で迎えてくれて。地域に支えられての三陸鉄道なんです。復興を後押しする力にもなれたと思っています。

6年が過ぎましたが地域によってはまだ復興途上。仮設住宅で苦労されている被災者もいます。そうした皆さんに寄り添い、活気ある三陸を取り戻すのが私たちの役割です。そのためにも全国の方にぜひ三陸に足を運んでほしいと思っています。雄大な自然やおいしい食べ物などがいっぱいあります。それらを楽しんでいただくことは復興への大きな力になるはずです。

※三陸鉄道＝岩手県や沿岸市町村が出資する第三セクター鉄道として昭和59年に4月に開業。震災後の運行再開に当たってはクウェート政府から日本赤十字社を通して寄せられた原油代金相当額約400億円の一部が活用されました。

ⓒ Ichigo Sugawara

「私たちは、忘れない。」プロジェクト
各地のイベントで被災者支援などをアピール

日本赤十字社は3月1～31日、震災の記憶の風化を防ぎ、復興への思いを未来へとつなげていくプロジェクト「私たちは、忘れない。」を全国で取り組みました。プロジェクトは東日本大震災から5年の昨年スタートしたもので今年で2回目。各都道府県支部では11日を中心にイベントを開催し、防災啓発や義援金の協力などを呼び掛けました。

〈石川県支部〉支部・病院・献血ルームの職員が参加する「救護服デー」を実施。その様子は学生奉仕団がリポートし、ネット公開中！

〈香川県支部〉防災・減災の啓発を目的に「赤十字非常食炊き出しコンテスト」を開催。3000人の来場者がオリジナル非常食に舌つづみ

〈北海道支部〉札幌市内の防災イベントでAED体験コーナーなど企画。親子で体験する方たちも

〈京都府支部〉青少年赤十字(JRC)メンバーらが、福知山市内で義援金や献血を呼び掛け

高田松原の再生めざした植林事業
「私が見ることはできないけど、孫やひ孫に再生した姿を見て欲しいんです」

「奇跡の一本松」と呼ばれる1本を除いた7万本の松が津波で消失した岩手県陸前高田市の高田松原。その再生を目指した植林事業が始まります。今年5月から3年をかけ、4万本を約1・8キロの海岸に植林していく計画です。昨年10月には海岸の一画に試験的に150本を植林。苗木は、冬の冷たい風にも耐え、根を下ろし始めています。

ⓒ Ichigo Sugawara

「この苗が立派な松林に育つには50年くらいかかります。残念ながら私が見ることはかないませんが、孫やひ孫たちの世代のために残していきたい。」地元のNPO法人「高田松原を守る会」の理事長、鈴木善久さん（72）は再生事業への思いをこう語ります。

東日本大震災で岩手県内最大の被災地となった陸前高田市。死者・行方不明者は人口の7・6％にあたる1773人、高田松原があった広田湾岸を襲った津波の高さは最大18・3メートルを記録しました。

鈴木さんも親族や中学校の教師時代の教え子などを失いました。自宅は被害を免れましたが、町内会長として住民の安否確認や避難所の運営に奔走。「最初はもう松原のことを考える余裕はなかったです。生きていくのに本当に必至でした」と震災直後を振り返ります。

復興のシンボル、犠牲者の供養として

「地震と津波を恨んだ」という鈴木さんですが、恨んでいるだけでは復興に向けて立ち上がることができないという気持ちも抱えていました。「私たちも復興のために役立てるはず。それが高田松原の再生なんです。きっと震災で亡くなられた方々の供養にもなるはずです」

江戸時代の先人により防風林、防潮林として育てられた高田松原。その白砂青松（はくしせいしょう）の景観は、国の名勝に指定され、市民にとっても身近な憩いの場として、愛され続けてきました。

「私も子どもの頃は、松原の海岸で泳いだり、潮干狩りをしたり。教師時代は部活で生徒と一緒にここを走りました。たくさんの思い出を育んできた場所なんです。これからの陸前高田で生きていく人たちにも、そういう思い出をたくさんつくってほしい」というのが鈴木さんの願いです。

松ぼっくりの奇跡

新たに植林される苗木4万本のうち3万本を県、鈴木さんたち「守る会」が1万本を担当します。実は、この1万本の中に高田松原の松の遺伝子を継ぐ苗木が約600本含まれています。津波で失われた松の種がなぜ残されたのか。鈴木さんは「奇跡の一本松と同様、種が残ったのも奇跡と言えるかもしれません」と育った苗木に目を細めます。

震災から2カ月後の平成23年5月、隣接する住田町に住む女性から「松原の再生に役立てて」とたくさんの種が守る会に届きました。種は女性が前年の秋、リース（飾り）を作るために高田松原で拾い集めた松ぼっくりから取れたものでした。その種から成長した苗木が今、広田湾を見下ろす高台の休耕田で育てられているのです。「もしその女性が松ぼっくりを拾っていなかったら、種を残しておいてくれなかったら…。すべてが奇跡だと思います」

全国の支援で始まる植林

守る会が育てる苗木には、茨城県の人から「松原復活に使ってください」と贈られた苗木も。そしてこの6年間、多くの市民や全国からのボランティアが苗木を育てていく活動や、苗木を風から守るための竹簀（たけす）作りなどに参加してきました。

植林は5月27日にスタートし、6月からは「守る会」として毎週日曜日に植林する予定です。「多くの市民やボランティアの皆さんの応援を得て、ついに苗を植えるところまできました。本当にうれしい。これからも大勢の皆さんの協力を得て、高田松原の再生へ元気に頑張っていきたい」

そう語る鈴木さんの目には、空に向かって青々と伸びる松の姿がしっかりととらえられていました。

ⓒ Ichigo Sugawara

高田松原を守る会理事長

鈴木 善久さん

〈愛知県支部〉豊田スタジアムで、名古屋グランパスの選手らとともに被災者への継続支援を訴え

〈大阪府支部〉大阪市内の復興支援イベントでAED体験コーナーや赤十字ブースを展開

〈熊本県支部〉〈ほモン誕生祭の隣接会場で、熊本地震、東日本大震災被災者への継続した支援とともに、赤十字の理解と協力を訴え

〈山梨県支部〉笛吹市内で防災啓発イベントを開催。好評を博した炊き出しや救急法体験

〈山口県支部〉サポーター企業の職員やボランティア、日赤職員ら1万人がプロジェクトバッジを着用。写真は赤十字サポーターの西京銀行員

〈北海道支部〉札幌市青年赤十字奉仕団のメンバーが、JR札幌駅前で義援金の募金活動

〈京都府支部〉府内に避難している被災者を支援する交流会で、缶バッジ作りコーナーを担当

〈栃木県支部〉佐野市内のショッピングモールで防災イベント。パネル展示や防災クイズ、子ども救護服の試着体験などに多数の来場者

寄付が支える
日本赤十字社の活動

「苦しんでいる人を救いたい」という理念の下、国内災害時の救護や、海外の紛争・災害での犠牲者支援など幅広い人道活動を展開している日本赤十字社。そのすべては、皆さまから寄せられる活動資金によって支えられています。昨年の熊本地震でも、全国の200を超える救護班が医療支援を行うなど、さまざまな活動を展開しました。

このような日赤の活動は、多くの国民からの幅広い支援により支えられており、現在、約960万人の皆さまが、日赤の目的と活動に賛同し、継続して活動資金にご協力いただいています。

しかし、近年は日赤の活動資金にご協力くださる方が徐々に減少しています。

日赤ではパソコンやスマホ、コンビニから手軽に活動資金へのご協力をいただける仕組みも用意しています。私たち日赤が「苦しんでいる人」のために、より大きな力を発揮できるよう、ぜひ日赤を支えてくださる仲間になってください。

社員制度をより分かりやすく

「社員」は、株式会社などの会社員という意味に捉えられてしまうこと、また、日赤の職員と混同されてしまうこともあります。そこで、「社員」を一般に分かりやすいように「会員」という名称で広げていくなど、社員制度を見直し、分かりやすい仕組みに改めました。

日赤の活動資金へのご協力方法

口座振替から

日赤ホームページ「寄付する」→「赤十字の会員になって支援する」→「口座振替による参加」から会員加入申込書をプリントアウトし、必要事項をご記入後郵送いただくと預金口座振替（自動引落し）により会員加入の手続きができます。

コンビニエンスストアから

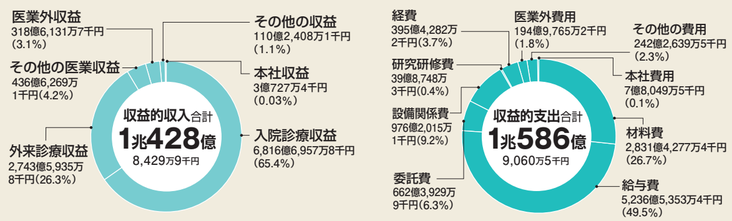
コンビニエンスストアにある情報端末（タッチパネル式）を使用して、日赤への寄付を簡単に行えます。

●ファミリーマート「Fami ポート」　●ローソン「Loppi」

平成29年度特別会計

医療施設特別会計

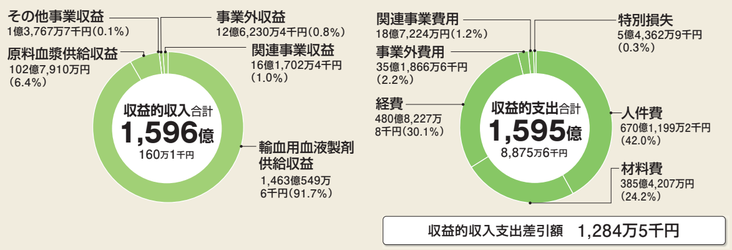
医療施設の運営等にかかる予算をまとめたもので、赤十字病院等医療施設の診療収入を主な財源として、医療施設運営のための費用等に充てられます。



収益的収入支出差引額　△158億630万6千円

血液事業特別会計

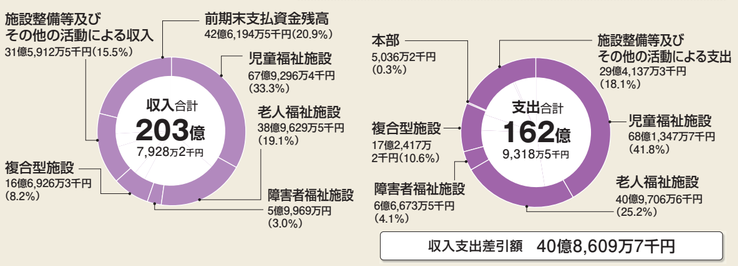
血液事業の推進にかかる予算をまとめたもので、輸血用血液製剤供給収益を主な財源として、安全な血液製剤供給のための費用等に充てられます。



収益的収入支出差引額　1,284万5千円

社会福祉特別会計

社会福祉施設の運営等にかかる予算をまとめたもので、措置費、委託費、介護保険、自立支援費、診療収入及び都道府県・市町村からの補助金を主な財源として、社会福祉施設運営のための費用に充てられます。



収入支出差引額　40億8,609万7千円

詳細は日本赤十字社ウェブサイト（業務報告まで）：www.jrc.or.jp/about/financialresult/

平成29年度
日本赤十字社の予算概要

日本赤十字社では、一般会計のほか、医療、血液、社会福祉の３つの事業にかかる特別会計を設けています。以下に平成29年度事業計画に基づく各会計の予算概要を報告します。各予算内容の詳細については、日本赤十字社のウェブサイト（http://www.jrc.or.jp）もしくは本社・支部でご覧いただけます。

※各会計額には、本社・支部・施設間の内部取引額を含んでいます（血液事業特別会計を除く）。

日赤の事業と財源

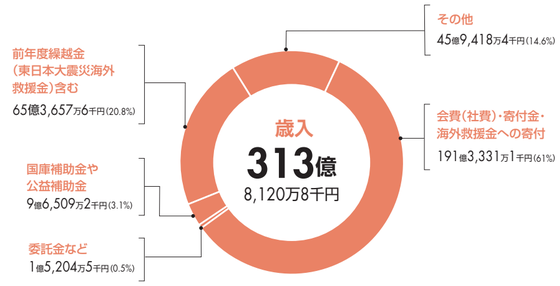
「苦しんでいる人を救いたい」という理念の下、日本赤十字社は災害救護活動や国際救援活動をはじめとしてさまざまな事業を展開しています。これらの事業の財源は、それぞれの事業によって異なっています。

会費（社費）や寄付金を財源とする一般会計

国内の災害救護活動、海外の紛争・災害での救援活動や開発協力活動、救急法などの講習普及、青少年赤十字の育成、赤十字ボランティア活動の促進などは、個人・法人の皆さまからの会費（社費）や寄付金を主な財源（一般会計）としています。

各事業での収入を財源とする特別会計

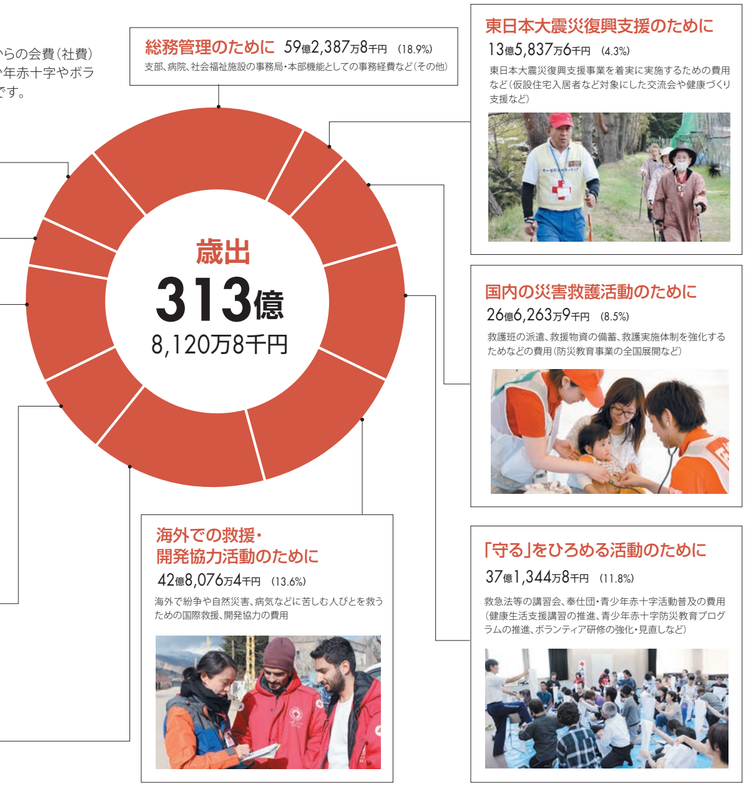
全国92の赤十字病院を中心に展開する医療事業は診療収入など、輸血を必要とする患者さんへの血液製剤の供給を行う血液事業は医療機関への輸血用血液製剤供給収入、児童福祉施設・高齢者福祉施設・障害者福祉施設など全国28の社会福祉施設は介護保険収入および措置費などを、それぞれ財源（特別会計）としています。



平成29年度一般会計

一般会計とは、本社及び47都道府県支部において、個人・法人の皆さまからの会費（社費）及び寄付金等を主な財源に、国際活動、災害救護、救急法等講習会、青少年赤十字やボランティアの活動など、本社・支部の事業にかかる歳入歳出をまとめたものです。

※東日本大震災義援金にかかる歳入歳出予算は、含まれておりません。



常任理事会開催報告

平成29年3月16日、本社において平成28年度第11回の常任理事会が開催されました。

記

1　資金の借入について
（特別養護老人ホーム日赤豊川荘の移転新築にかかる資金の借入）
2　理事会に付議する事項について
（日本赤十字社医療施設規則の一部改正）
審議の結果、資金の借入については原案のとおり議決され、理事会に付議する事項については、原案のとおり本年3月17日開催の理事会に付議することが了承されました。
また、日本赤十字社における看護基礎教育体制再構築の進捗状況及び予算の補正にかかる2月分の社長専決事項等の決定状況について、それぞれ報告しました。

理事会開催報告

平成29年3月17日、全国社会福祉協議会会議室（新霞が関ビル）において平成28年度3回目の理事会が開催されました。

審議結果は左記のとおりです。

記

1　第89回代議員会に付議する事項について
（役員の選出、平成29年度事業計画及び収支予算）
2　規則の改正について
（日本赤十字社医療施設規則の一部改正）
審議の結果、いずれも原案のとおり議決されました。
また、災害義援金にかかる報告、平成28年度「NHK海外たすけあい」にかかる報告、パレスチナ・ガザ地区における赤十字国際委員会の活動及び地域での防災教育を通じた災害被害軽減の取り組みについてそれぞれ報告しました。
また、常任理事会の理事の互選が行われ、渡邊芳樹、高橋孝喜、小櫻陽一、竹内希八、生塩まり子、木谷聡一、平松恵一、岩元基の各氏が選出されました。

第89回代議員会審議結果公告

平成29年3月17日、新霞が関ビル（全社協・灘尾ホール）において開催した第89回代議員会における審議結果は左記のとおりです。

平成29年4月1日

日本赤十字社

記

第1号議案　役員の選出について
社長、副社長2名、理事14名及び監事1名が次のとおり選出されました。
社　長　近衛　忠煇
副社長　大塚　義治　榊原　定征
理　事　渡邊　芳樹　田中憲次郎
中村美尾枝　佐々木義広
小田部　卓　中西　一順
藤原　忠彦　水野　光二
太谷　聡一　小田切泰禎
中富　博隆　大坪　紘子
高橋　孝喜　菊池　清之
監　事　上島　重二
第2号議案　平成29年度事業計画について原案のとおり議決されました。
第3号議案　平成29年度収支予算について原案のとおり議決されました。

AREA NEWS

雪上救護技術の向上目指し競技会

北海道

競技は技術の正確さはもちろん、タイムも評価の対象に。チームワークも重要です

北海道内各地のスキー場でパトロール活動などをしているスキーパトロール赤十字奉仕団が一堂に会し、日頃の訓練で培った技術を競う大会が２月26日、北海道南西部の登別市内のスキー場で開催されました。大会は、競技を通じて救助技術の向上を目指すもので、昭和48年から開かれています。

45回目を迎えた今年は、10チーム70人が参加。傷病部位の手当て、アキヤ（搬送用のソリ）の操作技術、雪上斜面で手当てをした負傷者をアキヤで搬送する総合競技の３種目で熱戦が繰り広げられ、栗山町スキーパトロール赤十字奉仕団が18年ぶりの総合優勝を果たしました。

県を越えた奉仕団交流で　仮設入居者を励まし

福島県 / 埼玉県

仮設入居者の減少もあり、鴻巣市赤十字奉仕団による福島訪問活動は今回の交流会をもって一区切りに

原発事故により福島県いわき市内に避難する大熊町の被災者と同市小名浜方部赤十字奉仕団の45人が２月24日、埼玉県鴻巣市を訪れ鴻巣市赤十字奉仕団と交流しました。交流会は、鴻巣市赤十字奉仕団が福島県内の仮設住宅に花を植える支援活動を続けてきた縁で実現したものです。

鴻巣市の伝統工芸品として知られるひな人形の展示鑑賞などを楽しんだ交流会。小名浜方部赤十字奉仕団の油座順子委員長は「仮設住宅の皆さんも今回の訪問をとても楽しみにしていて、良い気分転換になったと思います。これからも手紙などで交流を続けていければ」と話しています。

お人形がやってきた！　児童福祉施設で人形劇

青森県 / 岩手県 / 茨城県 / 東京都 / 大阪府

写真は青森県立はまなす医療療育センター。子どもたちは可愛らしい人形に会えるのをとても楽しみにしています

大阪赤十字病院附属大手前整肢学園で３月27日、株式会社ミツウロコグループホールディングスの支援による人形劇が開催されました。人形劇は同社の社会貢献活動として平成25年度から実施されているもの。昨年度は８月～11月にかけて青森、岩手など各地の児童福祉施設でも開催されています。

人形劇を観劇した子どもたちは、人形の面白い動きやおしゃべりに大興奮。人形たちが織りなす物語の世界にぐんぐん引き込まれていきました。観劇後は、絵本のプレゼントや人形と触れ合う時間もあり、会場は終始、子どもたちのたくさんの笑顔に包まれました。

化学テロに備えた訓練に参加

京都第一赤十字病院

参加要員は汚染防護服を着用。実践さながらの訓練内容で意識を高めました

化学剤散布による多数の傷病者発生を想定した国民保護共同実動訓練が２月２日、京都市内で行われ、京都第一赤十字病院では看護学生を含め200人が、被災者受け入れと医療救護の手順などを確認しました。

同訓練はテロなどの災害発生に備えたもので、内閣府や京都府、自衛隊、警察、消防、DMATなどが参加。同院では、計画策定や他機関との調整を約１年前からスタートし、勉強会や予行演習を繰り返してきました。訓練当日は病院本部と現場指揮本部を設置。救急駐車場に設けた除染やトリアージのエリアで対応を行ったほか、救急外来などでの診療や検視の訓練、遺族対応訓練も行いました。

ついに来た！　高校生に熱い献血ブーム?

徳島県

献血３回目の徳島科学技術高等学校の生徒は「卒業しても友達を誘って献血ルームに行きます」

徳島県の高校生の間に、献血ブームの兆しが見え始めています。平成19年から減少していた高校生の献血協力ですが、平成23年に男性の400ml献血可能年齢が17歳に引き下げられてから徐々に回復。平成28年度は２月末日までに過去10年間で最も多い延べ555人の高校生が献血に協力しました。

今年１月には、献血協力者の多い徳島商業高等学校をラジオ番組が取材。「献血で人の命が救える」といった生徒たちの声が放送され、他校の生徒に刺激を与えました。平成29年度は高校生献血者と徳島県知事との対談が地元ケーブルテレビで放送される予定です。

レジャー施設職員らを対象に日赤の安全講座

神奈川県

駅ホームからの転落事故の防止など、視覚障害者への支援は社会全体で取り組む課題です

神奈川県支部は、箱根と鎌倉の観光施設職員らを対象に、AEDの使い方や視覚障害者への支援法などを学んでもらう講座を１～２月にかけて計12回開催しました。

この講座は、多くの人がより安心して観光やレジャーを楽しめる地域づくりを目指したもの。企業等連携プログラム「いつも ここに 安心を」の一環として約５年前からさまざまな団体・地域を対象に取り組んできました。今回の講座には「心肺蘇生・AED」「けがと急病」「高齢者を知る」「視覚障害を知る」の４つのコースを設定。旅館やホテル、自治体、スポーツジム、神社、教会など幅広い団体から104人が参加しました。

ウェアラブル端末で手術室の業務改善

京都第二赤十字病院

メガネに必要な情報が表示され、画面操作は音声で。手首につけたバーコードリーダーで、正しいものかどうかをチェック

眼鏡型のディスプレイを備えたパソコンを装着。目の前に表示される画像と番号に従って、手術に使う機材を取り揃えていく――こんなSF的な「ウェアラブル端末」を京都第二赤十字病院が導入。手術室の業務改善に生かしています。

ウェアラブルは体に装着するパソコンを指す言葉。両手が自由になることが特徴です。現在、中央滅菌センターでの手術材料ピッキングに活用されていて、大幅な業務時間削減とミス防止の効果を発揮しています。担当する医療情報室長の田中聖人医師は「最終的には看護に役立て、業務の省力化につなげたい」と展望を語っています。

震災の記憶を胸に36人が卒業、そして社会へ

石巻赤十字看護専門学校

避難所での救護活動に奔走した看護学生の姿を知り、看護の道を目指した卒業生も

石巻赤十字看護専門学校（宮城県石巻市）の卒業式が３月10日に行われ、36人が看護師としての一歩を踏み出しました。同校は東日本大震災で校舎が壊滅。震災後は、他校の校舎の一部を間借りして授業を行ったこともあります。石巻赤十字病院内の仮設校舎を経て、２年前に新校舎へ移転。今回の卒業生も約１年間、仮設校舎での学校生活を体験しました。

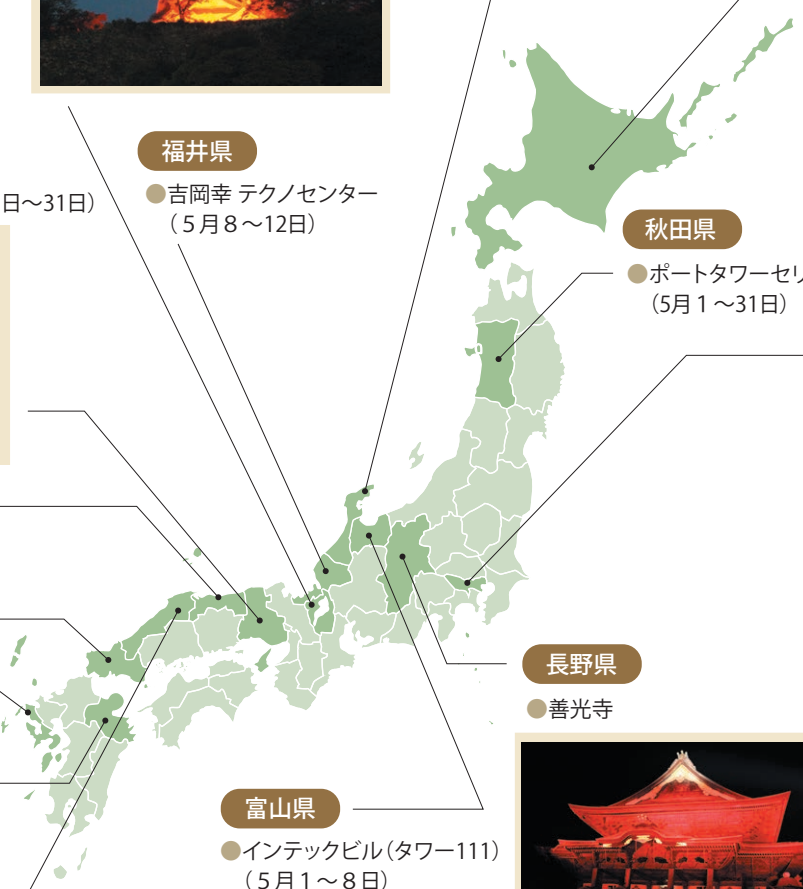
卒業式で金田巖校長は「災害医療や看護の知識、実践力が教師・先輩から受け継がれていることの自覚を」「どのような困難も、培われた聖職への努力と鍛練が乗り越えさせてくれる」との言葉を卒業生に贈りました。

世界赤十字デー（5/8）に

日本各地を照らす ライトアッププロジェクト2017

5月8日は世界赤十字デー（赤十字の創始者アンリー・デュナン生誕の日）。日本赤十字社では、紛争や災害で苦しむ人々に寄り添い、アンリー・デュナンが強く訴えた「人道」への理解を深めていただくことを目的として、この日を中心に「レッドライトアッププロジェクト2017」を実施します。5月上旬、右記の歴史的建造物やランドマークとなる施設、企業様などにご参加いただき、全国を赤色で彩ります。

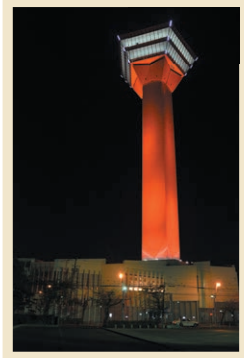
※３月22日現在の参加状況。赤十字NEWS５月号では、最終参加施設を掲載します。参加施設・企業、絶賛募集中です！



滋賀県
●彦根城

石川県
●金沢城
（５月８日を含む１週間程度）

北海道
●五稜郭



兵庫県
●阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター（５月１日～31日）

福井県
●吉岡幸 テクノセンター
（５月８～12日）

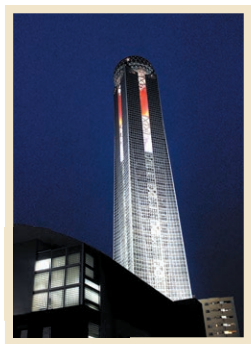
秋田県
●ポートタワーセリオン
（5月１～31日）

東京都
●ラフォーレ原宿
●清水建設（５月14日）

●表参道ヒルズ
●六本木ヒルズ
●虎ノ門ヒルズ

鳥取県
●お城山展望台
河原城（５月８日のみ）

山口県
●三宅商事本社ビル
（４月28日～５月31日）
●下関市海峡ゆめタワー

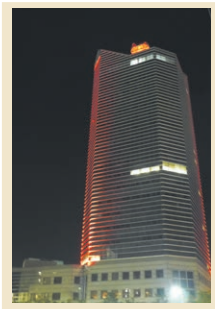


長崎県
●稲佐山山頂電波塔（５月８日）
●眼鏡橋（５月１～８日）

大分県
●府内城跡（大分城址公園）
（５月８～12日）

島根県
●松江城（５月８～15日）

富山県
●インテックビル（タワー111）
（５月１～８日）



長野県
●善光寺

●松本城

Voice ＆プレゼント

Voice 赤十字 NEWS にお寄せいただきました読者の皆さまの声をお届けします。

●「海外たすけあい」で紹介されていた写真のコラージュでできたハートマーク。投稿された皆さんの優しい気持ちの象徴のような感じが伝わって、素敵でした（寺田さん・新潟県）

●この紙面上の方々は皆さん目が輝いていますね。防災教育プログラムに参加する生徒さんの笑顔など、主体性を感じ取れる様子に感動しました（Y さん・宮崎県）

プレゼント

日赤熊本県支部作成のくまモンピンバッジとシールをセットにして３名様にプレゼントいたします。以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールでご応募ください。

①お名前（匿名をご希望の方は、その旨もご記入ください）
②郵便番号・ご住所　③電話番号　④年齢
⑤赤十字 NEWS４月号を手にされた場所（例／献血ルーム）
⑥４月号で良かった記事、興味深かった記事はどれですか？（いくつでも）
Ⓐ今月の出会い　Ⓑ熊本地震から１年　Ⓒ健康豆知識
Ⓓ「私たちは、忘れない。」サポーター企業、イベント紹介　Ⓔ踏ん張り続けた6年
Ⓕ平成29年度日本赤十字社の予算概要
Ⓖ常任理事会開催報告、理事会開催報告、第89回代議員会審議結果公告
Ⓗエリアニュース　Ⓘ赤十字ライトアッププロジェクト2017のお知らせ
ⒿLove in Action Meeting（LIVE）応募受付　Ⓚプレゼント
Ⓛ平成29年度青少年赤十字海外支援事業　Ⓜ人道支援の現場から
⑦赤十字 NEWS のご感想、扱ってほしいテーマ、その他 Voice（読者の声）への投稿もお待ちしています。

応募先● 郵　送／〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 広報室　赤十字NEWS４月号プレゼント係
FAX／03-6679-0785
メール／koho@jrc.or.jp（件名「赤十字NEWS４月号プレゼント係」）

応募締切● ４月24日（月）必着
※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

応募受付中！ LOVE in Action Meeting（LIVE）4500人を無料ライブにご招待

日本赤十字社は、主に若者の献血推進を目的とした「LOVE in Action プロジェクト」の一環としてライブイベント「LOVE in Action Meeting(LIVE)」を6月6日に東京国際フォーラムで開催。抽選で4500人を無料ライブにご招待します。※別途発券手数料が必要です。

同ライブイベントは6月14日の世界献血者デーにあわせて開催しているもの。８回目を迎える今年は、KANA-BOON、Little Glee Monsterほかアーティストらが出演。ライブやトークを通して、献血の重要性や若年層の献血率が減少傾向にある現状を伝え、協力を呼び掛けます。

◆**場所**：東京国際フォーラム　◆**日時**：６月６日（火）17時30分開場（予定）
◆**応募期間**：４月25日（火）23：59まで
※応募方法など詳細は、公式WEBサイトをご確認ください

次号「赤十字NEWS」５月号のお知らせ

５月１日に140周年を迎える日本赤十字社。
それを記念して、赤十字NEWS５月号を16ページに増量！
「いまあらためて、赤十字の理念と活動を伝える」「社会（読者）とともに考える」をメインコンセプトに紙面を展開します。どうぞお楽しみに。

平成29年度青少年赤十字海外支援事業

一人一人の優しさが命を救う大きな支援へ

青少年赤十字（JRC）加盟校の児童・生徒による「１円玉募金」を主な財源として実施される青少年赤十字海外支援事業。平成29年度からは、一昨年大きな地震に見舞われたネパールと、南太平洋の島嶼国バヌアツの２カ国を対象に、新たな支援事業が３カ年計画でスタートします。両国の赤十字社を通じて、衛生教育や衛生環境改善、防災教育の普及を進める計画。日本の子どもたちの善意を、世界の子どもたちの笑顔につなげていく取り組みです。

学校・地域の衛生環境を改善

ネパール

ネパールは、毎年２万人を超える人が不衛生な水の使用による感染症で亡くなるなど、衛生環境の改善が課題になっています。2009年には、下痢症とコレラ感染が大規模に発生し、被害者数は20万人に達しました。

ネパール政府や同国赤十字社は、長年にわたり、この問題の改善に取り組んでおり、トイレ設備の普及（1990年の６％が2011年には62％へ）などの成果を上げています。日本赤十字社も学校での衛生教育授業や衛生施設整備の支援を続けてきました（2015年12月まで）。しかし、2015年４月に発生した大地震により、学校のトイレ設備普及が大きく後退するなど、地震は計画していた水の衛生化計画に決定的なダメージを与えたといわれています。

今回の支援事業は、同国の中でも衛生環境が悪く、感染症の発症率も高いパルバト郡・シャンジャ郡にある６村、59学校が対象です。トイレや手洗いの大切さを子どもたちに教えるとともに、手洗い場を各学校へ設置する支援も実施します。衛生的な行動習慣が、学校から子どもたちへ、子どもたちから親・地域へと広がることが期待されています。

子どもの命を守る防災教育を促進

バヌアツ

バヌアツは、世界で最も自然災害に対して脆弱な国。地震や津波、火山噴火、サイクロン、洪水といった災害リスクに常にさらされており、一昨年３月には巨大サイクロンにより人口の70％が被害を受けました。しかし、識字率が低い同国では防災知識の普及も不十分。学校での災害対策も進んでいないため、被害の拡大を招いています。

今回の支援は、学校での防災教育を通じて、バヌアツの子どもたちに自らの命を守る力を育んでもらおうというものです。日赤が学校用に開発した防災教育プログラム「まもるいのち　ひろめるぼうさい」をベースに、同国の災害に合わせた防災プログラムを作成。モデル校となる６つの地域（島）の18の小学校では防災授業も実施していきます。

これらの支援は、自然災害時の対応で政府の補助機関として活動するバヌアツ赤十字社を通じて展開されます。防災教育の分野でも政府との公式なパートナーシップを締結した上で、作成した防災プログラムを小学校の授業で活用するほか、全島で教員養成カリキュラムへの防災教育導入も図る計画です。

1学校で登校時に手洗いをする生徒（ネパール）　2衛生知識を伝える布製のポスター（ネパール）
3マレクラ島の小学校での授業の様子（バヌアツ）　4支援先の小学生（バヌアツ）

１円玉募金　募金活動を通じて成長する子どもたち

街頭で募金活動をする子どもたち

１円玉募金は昭和34年に開始し、現在も続いています。お小遣いの中から募金を出すことによって、子どもたちが奉仕精神を育んでいくことが目的です。支援先の国の文化や生活などへの関心を広げることで、「国際理解・親善」の役割も果たしています。

自分たちの募金がどう役立てられるのかを学ぶために、海外の支援地に実際に行き、現地の子どもたちとの交流も続けられてきました。また、青少年赤十字メンバーによる今回の支援地ネパール、バヌアツへのスタディーツアーも来年度以降に予定されています。

人道支援の現場から 9

フィリピン赤十字社の８原則目は「笑顔」です

三浦 貴子
Takako Miura

二国間支援
フィリピン保健医療支援事業（事業管理）

フィリピン・オーロラ州内で、地域保健ボランティアを育成し、地域における保健医療の脆弱性改善を目指す活動を行っています。私の任務はこの取り組みの事業管理ですが、同時に私自身が国際活動に貢献できる力を身につけるための“研修”にもなっています。

フィリピンの人はどんなことでも楽しむことが得意。誰であっても受け入れる優しさにあふれています。救急法トレーニングでは、初めて会った参加者同士が友人のように笑いながら訓練を受け、食事のときにはボランティアさんが地域で取れた食材を使った料理をお腹いっぱい食べさせてくれます。

事業用車両が故障して動けなくなったときは、メンバーの一人が雨の中、郡長さんの自宅までバイクを走らせ、車を借りてきてくれました。寒い日だったけれど、みんなが必死に助けてくれたことがとても嬉しかったことを覚えています。小さめの車だったので、ぎゅうぎゅう詰めの定員オーバー（フィリピンでは当たり前?）でしたが、遠足に行く前のようなワクワク感もわいてみんなで大笑い。一体感も高まりました。

オーロラ州内で「レッドクロス」と言うと、小さな村の人でも話を聞いてくれます。赤十字の基本７原則の共通理解があるから、一緒に働くスタッフともすぐに「仲間」になれます。初めての海外派遣で不安と緊張でいっぱいでしたが、ここにはそんな思いを一掃してくれる愉快なスタッフと、優しさであふれた人々がいます。私が笑顔でいられるように、互いを思い合える人がいるこの地域には笑顔の花がいつまでも咲き続きます。